海外旅行記～その他～

ローマの休日～ヨーロッパ旅行1996

Each in its own way was …unforgettable…It would be difficult to…Rome!
By all means, Rome. I will cherish my visit here in memory, as long as I live.

これは、映画「ローマの休日」のラストシーン。遊びたくって仕方がないお年頃のオードリー・ヘップバーン演じるヨーロッパの小国の王女が、公式訪問中のローマで、宿泊先を抜け出して、実は新聞記者の若者とローマをエンジョイします。最初は、特ダネのために王女に接していた記者が、時を共有すると共に恋に落ちて・・・最後は、それぞれの現実に引き戻されるというストーリーで、空白の一日を終えた王女に記者団から浴びせられた、ヨーロッパ公式訪問中の都市で、どこが最も印象深いかの質問に答える場面です。
「いずこも、それぞれ、忘れがたく、お答えするのは困難ですが・・いえ、ローマです。なんと言ってもローマです。ここに来た思い出を大切にするでしょう、生きている限り。」

王女は、なぜ恋に落ちたのでしょう？答えは、そこがローマだったから。文化、建築、人々すべてが魅力に溢れています。アン王女は、新聞記者ジョー・ブラッドレーに恋したのでしょうか？実はローマにfall in loveしたのかもしれません。約10年前、そんな街ローマを旅してみました。

王女がロングヘアーをバッサリ切った美容院はトレビの泉付近、髪を、”Off, off , off!” などと言いながら切ってくれた美容師が誘った船上ダンスパーティーは、サンタンジェロ城、王女、黒服と大乱闘のシーンです・・・アン王女に恋したお代官様も、ローマにfall in loveもう一度ゆっくり歩いてみたい街です。

″I'd like to do just whatever I liked the whole day long.″
″You mean things like having your hair cut, and eating gelati.″
″Yes, and I'd like to sit in a sidewalk cafe and look in shop windows walk in
the rain! Have fun and maybe some excitement. It doesn't seem much to you, does it?″
″It's great! Tell you what. Why don't we do all those things together?″

こりゃまた、オシャレ～な、口説き文句ですね！
「一日好きなことして過ごしたい。」って言うカノジョに、
『キミがやりたい事、並べてごらん。一つ一つすべてやっつけていこうじゃないか？』
大阪でそんな事囁いたら、
「法善寺横丁行って水掛不動で願掛けて、太左衛門橋のたもとの『大たこ』でたこ焼き買って、グランド花月でごめんくさ～い！」なんて答えが返ってきそうですが、お代官様がそんな洒落たセリフを吐いたかどうかは別にして、そんなローマを旅してみましょう。
王女がジェラート片手に、ジョーと再会した場所がスペイン広場。ここは典型的な観光地で、ポケットに手を突っ込んで財布を抜き取ろうとするジプシーの子供達が寄って来る上に、置き引き要注意です。ジョーが最初に王女を案内したのが、コロッセオ。日本語に訳すと武道館かな。

王女が街に出て居眠りしていた場所が、フォロロマーノ。だけどあまり広すぎてどこで撮影したのか特定できません。あとは、嘘つきが手を入れたら、噛み切られる伝説の石、真実の口はサンタ・マリア・イン・コスメディアン教会です。

映画では出てきていませんが、キリスト教の総本山はバチカン市国のサンピエトロ大寺院、ドーム型の神殿パンティオンと素敵な場所のオンパレード。ホント、アホ面下げて見上げるばかりです。
"Rome. I will cherish my visit here in memory, as long as I live."

ロード・オブ・ザ・リング～ニュージーランド旅行2003

Three Rings for the Elven-kings under the sky,
Seven for the Dwarf-lords in their halls of stone,
Nine for Mortal Men doomed to die,
One for the Dark Lord on his dark throne
In the Land of Mordor where the Shadows lie.
One Ring to rule them all, One Ring to find them,
One Ring to bring them all and in the darkness bind them
In the Land of Mordor where the Shadows lie.

ニュージーランドと言えば、オールブラックス？ヒツジ？飛べない鳥キーウィ？ミルフォードサウンドにマウントクック～雄大な自然は、壮大な3部作・映画「ロード・オブ・ザ・リング」の撮影現場『中つ国

（Middle-earth）』としても有名です。
　現実に、ホビット庄など、この映画の撮影場所を巡るツアーを募集する旅行会社も存在しました。オーストラリアも素敵ですが、ニュージーランドも魅力いっぱいで、もう一度訪問したい国です。

1、旅の仲間～南島

　2003年ゴールデンウィークは、初めてニュージーランドを訪問。
　行程は、関空からクライストチャーチへ。バスでマウントクックからクィーンズタウンに移動。最終日は、オークランドと新聞ナナメ読み的な毎日でこの国を満喫しました。
　旅の仲間は、お代官様と裏代官。いつもそうですが、基本的に団体旅行は苦手で、裏代官がインターネットで現地の情報を調べて、お代官様が怪しい英語（いや、ジェスチャーと単語）を駆使して二人で歩き回るのがお好みです。
　基本的に、旅行会社で発売する「オークランド・フリープラン」みたいな名前で、往復のフライトと現地のホテルだけがセットになっているツアーを購入して、行動は、自分たちで計画しています。

　最初の訪問地クライストチャーチは、スーパー12のニュージーランド最強チームであるクルセイダーズの本拠地なので、最初にチームジャージを購入。ランドマークでもあるゴシック様式の大聖堂に上って町を見下ろせば、広場で巨大なチェスを楽しむ人から、花と緑の木々にフロドにサムにガンダルフ・・・ってホンマかいな。

　また、タクシーに乗って空港方面に、国際南極センターで氷点下体験と雪上車試乗。ウィローバンク・ワイルドライフパークでは、飛べない鳥キーウィ、なぜか大ウナギの大群などを見学。

チャーチ（現地の人はクライストチャーチをこのように呼びます。日本で言う尼崎をアマと省略するのと同じですね。）でのオススメは『パンティング（Punting）』これは、チャーチの中心を流れるエイボン川での舟遊びで、船頭さんが竿竹で船を操ってのんびりと風景を楽しみます。船頭さんは、楽しいお話をしてくれますが、横文字ですから、日本人の誇りを全面に押し出して、3Sで対処させていただきました。

ちなみに3Sとは、三つSの付く単語で、smile・sleep・silenceすなわち「にこやかに、眠ったふり、だんまり」ですが、学生時代もう少し英語を勉強しときゃ良かったのに・・・と反省だけはします。また、これは人気のイベントゆえに予約が必要です。ちなみに、ボートハウスに行って、その日の空き時間（1時間後・・）に予約を入れて乗せてもらったのですが、たまたま乗客が私たちだけだったので、同じ料金で贅沢した気分になりましたね。

次の訪問先は、アオラキ。マオリの言葉で「雲を突き刺すもの」と呼ばれるニュージーランド最高峰のマウントクックです。標高3754mは、富士山と同じくらいの高さで、原生林と氷河に囲まれています。

氷河といえば南極の氷の大陸や北海道の流氷をイメージしますが、ニュージーランドの氷河は、積雪の上に、またまた雪が積み重なり、その重みの圧縮により氷の塊が形成されたもので、この氷塊が地面を流れ落ちることによって削られた地形をフィヨルドと呼びます。そして、マウントクック周辺には、氷河が溶けて流れ込んだコバルトブルーの水が神秘的に揺れる湖が点在します。

今回のツアーでは、マウントクック登山口の「ハーミテージ」なるホテルで宿泊後、一日フリーだったので、周辺をハイキングしてロード・オブ・ザ・リング気分を味わい、アラゴルンやギムリの歩いた

道を探そうとしたのですが、大雨に見舞われて断念・・・レインコート着て周辺の原生林を歩いて、オールブラックスの胸のロゴとしても有名なsilver ferns（銀色のシダ）を見学・・・というより「ずぶ濡れ」・・・山の天気は気まぐれですね。

特記事項としまして、ハーミテージのバイキングスタイル（ブッフェと言いますが）の夕食は最高。何がすごいかと言えば、こんな山の中なのに、生牡蠣が食べられるのです。プリプリっとした身に少しレモンを搾って、軽く岩塩を振りかけて、お口の中に入れると磯の香に包まれます。ビーフにラムにロブスター、スープにサラダ・・とシェフこだわりの逸品が並んでいましたが、大自然の恵みに軍配。白ワインを飲みすぎてしまいました。

2、二つの塔～南島と北島

二つの塔は、アイゼンガルドの砦にそびえる「オルサンクの塔」とモルドールの暗黒の塔「バラド＝ドゥア」・・ってロード・オブ・ザ・リング見た人でも把握していないかも。

ニュージーランドの二つのとう（島）といえば、雄大な自然の南島とマオリ文化の北島です。
続いての訪問先は、クィーンズタウン。この時期の南半球は秋で、ポプラ並木が金色に輝く姿が素敵です。特にクィーンズタウンから、陽気な運転手さんの操るバスに乗って半時間の場所に位置するアロータウンの大自然の黄金色の色彩空間には圧倒されます。例えようのない美しさを味わうには、現地に行くほか術はありません。

ここは小さな町ですが、かつてゴールドラッシュ時代に栄えた場所で、歩き回るとお洒落な建物とロード・オブ・ザ・リングの舞台に出くわします。現在は、観光ラッシュで栄えているようです。

クィーンズタウンでは、スカイライン・ゴンドラに乗って、ボブズ・ピークに登ります。山上から見る風景は、ガイドブックの表紙・・・というか、ニュージーランドの代表的な風景で、遥か下方に横たわるワカディプ湖を眺めれば、オルサンクを支配するサルマンの気分になれます。いや、美しい風景を手にした王様の気分になれます。

もう一つの呼び物は、フィヨルドのミルフォードサウンド。断崖絶壁が切り立つ海岸線はダイナミックで、この入り江は、ニュージーランドを探検したキャプテン・クックも外海のタスマン海から発見できなかったほど深く入り組んでいます。

クック船長みたいに「クルーズ船に乗ってみるふぉーど！」などと言いながら出港。断崖の地形に挟まれて、落差の激しい滝を下から眺めたり、岩の上で休憩するオットセイを見つけたり、フィヨルドという大自然の力によって形成された地形の存在感に圧倒されっぱなしです。

おまけに、当日は雨が降った関係上、流れ落ちる滝の水量が多いだけでなく、道中の道のりでも、崖から無数の白糸を引くように流れる水を見学することができました。また、ここまでの道（ミルフォード・ロード）は、日本の自動車のコマーシャルフィルムに使用される風景で、メリーとピピンがスカイラインに乗ってファンゴルンの森をエントと共に走りぬけるシーンがあったかも知れませんね。

あとは、世界で一番人気のあるハイキングコース「ミルフォードトラック」を歩いてみたいですね。けど、これを歩くには4泊5日のガイドツアーに登録しなければならない上に、時間と言語の高い壁があるので、憧れとして取っておくしかありませんね。ここには、「二つの塔」の冒頭のシーンでボロミアを乗せたボートが流れ落ちた滝があって、レゴラスと共にエルフ語で歌を捧げたくなるかも知れません。

滞在最終日は、いよいよ北島へ。ニュージーランド最大の都市オークランドは、スーパー12のブルーズ本拠で、2003年当時、スタンドオフとしてカーロス・スペンサーが所属していて、クルセイダーズのアンドリュー・マーティンスとオールブラックスの背番号10番争いが白熱している状況だった関係で、ブルーズのジャージも欲しいし、イーデンパーク見て、マオリ文化に触れて・・などと期待に胸を膨らませて、クィーンズタウンのホテルを早朝出発。

現地添乗員さんに連れられて空港へ、チェックインを済ませてニュージーランド航空のフライト待

ち・・・フライト待ち・・・ありゃま、おかしな状況で、機体整備不良により、キャンセルに。
　次の便は、4時間後。それならもっとゆっくりクィーンズタウンを見学させてくで～！結局、近くのスーパーで日用品買って、食事して仕切り直して、待ちくたびれて、次の便でオークランドへ。

　オークランド到着時は、外は真っ暗。オークランドの添乗員さんに、おいしいシーフードレストランを教えてもらって、そこで食事してホテルに戻ってバタン・キュー・・翌日は、目覚めてすぐ空港に行って関空に飛ぶ・・って、オークランド観光してへんがな！

　という理由で、もう一度ニュージーランドへ行きたいと思っています。とりあえずは、日を改めてオークランド観光、北島でマオリ文化の研究、ラグビー観戦、できればオールブラックスのハカ（ウォークライ）を目の前で見たいですね、そして、ロード・オブ・ザ・リングの舞台をゆっくりと歩いてみたいですね。

3、王の帰還～オールブラックス・ワールドカップ優勝？

　ニュージーランドの国技といえば、ラグビー。
　国の代表であるオールブラックスに選ばれるのは名誉なことであり、リスペクトを受けると共にそれ相応の責任を果たさなければなりません。すなわち、勝たなければなりません。
　特に、オールブラックスのキャプテンなどに指名されたなら、日本の国技・大相撲の横綱と同じで、心技体と三拍子揃った人物であることを要求されます。こちら朝青龍や時津風親方など、別の意味でマスコミを賑わしていますが、オールブラックスは勝利でマスコミを賑わします。

　2007年はフランスでのワールドカップ開催。
　キャプテン、リッチー・マコウが率いる史上最強のオールブラックスは、王者として帰還できるのか。20年ぶりにエリスカップ（優勝杯）を持って帰れるのかが、この大会の一つの焦点です。
　予選は、イタリア、ポルトガル、スコットランド、ルーマニアとヨーロッパの強豪チームを寄せ付けず圧倒的な勝利で決勝進出。

　クオーター・ファイナルの相手は、開催国のフランス。戦いの儀式ウォークライに対抗するフランスは、赤白青のトリコロールカラーのTシャツに着替えて肩を組み、オールブラックスを睨みつける。フランスのフランカー、セバスティン・シャベルの怖い顔が際立ち、開催国の意地と、王者の意地がバチバチと飛び交う。

前半戦は、ジェリー・コリンズのトライなどにより13対3でリード。
後半戦、ルーク・マカリスターのイエローカードからチャンスをつぶすオールブラックス。ハーフ陣が冴えずちぐはぐな攻撃が続き67分に18対20と逆転された後、敵陣深く攻め込むもペナルティーを犯すことなく集中するフランスのディフェンスの壁の前に阻まれ、打つ手なく得点を重ねることができず敗戦。
史上最強チームで望んだリッチー・マコウ組は、ワールドカップ史上最悪のベスト8という結果で、開催国の意地の前に沈みました。
さて、エリスカップの行方は？

４年後のワールドカップ開催国は、皮肉なものでニュージーランド。
王の帰還の日は、その年まで持ち越されました。そして、魅力満載のこの国への思いが、また一つ強くなった気がします。
オールブラックスが王として帰還する日と、私が観光客として帰還する日・・どちらが早いでしょうか？
それは、全てを支配するリングだけが知っているかも。

（参考）オープニングの和訳

三つの指輪は、空の下なるエルフの王に、
　七つの指輪は、岩の館のドワーフの君に、
九つは、死すべき運命（さだめ）の人の子に、
　一つは、暗き御座（みくら）の冥王のため、
影横たわるモルドールの国に。
　一つの指輪は、すべてを統べ、一つの指輪は、すべてを見つけ、
　一つの指輪は、すべてを捕えて、暗闇の中につなぎとめる。
影横たわるモルドールの国に。

戻る